

今月のことば

人は去っても
その人の
ほほえみは
去らない

(中西智海)

龍谷大学非常勤講師
小池 秀章 こいけ ひであき

身近な人が亡くなれると、それをどう受け止めたらいいか分からず、悲しみにくれることがあります。私たちは、亡き人をどう受け止めたらいいのでしょうか。

一般的には、亡き人が迷わないように、そして、いい所に行けますようにという意味で、お経を読んだり、お念仏を称えたりしていると思っている人が多いように思います。しかし、浄土真宗では、そのようには捉えません。

まず、「亡き人」≡「迷っている人」とは受け取りません。迷っているのは、亡き人ではなく、「亡き人が迷っていると思っ

ているその人」なのです。
浄土真宗に生きる者にとって、亡き人は、仏（阿彌陀如来）さまのはたらきによって、浄土に往き生まれ、仏さまとなり、今度はこの世に還ってきて、私たちを真実に導くはたらきをしてくださる方なのです。

「人は去っても その人のほほえみは 去らない
人は去っても その人のことばは 去らない
人は去っても その人のぬくもりは 去らない
人は去っても 拜む掌の中に 帰ってくる」

(中西智海「ひととき―私をささぐる言葉」より)
お念仏に生きる者にとって、死は永遠の別れではありません。手を合わすところに、亡き人と会える世界があります。亡き人が、仏さまのはたらきと一つになって、私たちの所に還ってきてくださる。そんな世界に出遇ったことを嬉しく思っています。

合掌